

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 五 號 第 十 八 卷

大正三十三年五月一日發行

論 叢

投資と租税……………法學博士 神戸 正雄

フオンウイゼの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

水戸藩常平倉の成立……………經濟學博士 本庄榮治郎

海運同盟に對する英吉利の態度……………法學士 小島昌太郎

時 論

自作農地創定施設要項を評す……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

スミスの學說に關して福田博士の教を乞ふ……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの勞賃論……………經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

スミスの植民地觀の由來と地位……………經濟學士 長田 三郎

フオン・ウイゼの社會學論 (一)

(獨逸最近の社會學論の三)

米田庄太郎

前節に述べしフオン・ペーロー氏の論文によれば、嘗に一般的な總合的な學問としての社會學、即ち一般的總合的社會學の可能性が否定されるのみならず、更に特殊學としての社會學の可能性も否定されることになる、つまり何れの意味に於ても社會學は、大學に於て獨立なる講座或は教授職を有する獨立なる學問として、存立し得ないことになるのである。されば今日獨逸に於て社會學の可能性及び學問的必要を主張する人々、或は既に大學に於て社會學を講義し、更に社會學の教授に任命されて居る人々の方面からして、大に反對論の起るのは當然である。而して一般的總合的な學問としての社會學の可能性を否定しつゝ、特殊的な學問としての其の可能性を、先づ明確に論述したのは獨逸の社會學者にして、且つ其の方針は今日の獨逸の社會學界の一特徴とも見做し得られると思ふから、余は此處に先づ右の方針をとる社會學者の方面からの反對論、即ち特殊的な學問としての社會學の可能性を主張する説を、考察することゝするが、今此の方針からフ

オン・ベロー氏の論文を論評し、同氏と共に一般的總合的な學問としての社會學を否定しつつ、しかも同氏に反對して特殊的な學問としての社會學の成立を主張する論文に就て、先づ注意すべきはレオポールド・フォン・ウイゼ氏が、同じくシュモラー年報千九百二十年度第二冊(Schmollers Jahrbuch. 44. Jahrgang. Zweites Heft)に公にせるもの、「特殊學としての社會學」(Die Soziologie als Einzelwissenschaft)である。但しフォン・ウイゼ氏(Leopold von Wiese)は新設のケルン大學の經濟的國家學及び社會學の教授(Professor für wirtschaftliche Staatswissenschaften und Soziologie)にして、而して特殊學としての社會學の成立を、最も熱誠に主張しつつある一人である。余は此處に先づ右の論文によりて、同氏はフォン・ベロー氏の見解を批評しつつ、如何に特殊學としての社會學の成立を論辯するかを考察し、夫より更に同氏の他の論文や著書によりて、同氏の社會學論の發生及び發展を論究したいと思ふ。

一 「特殊學としての社會學」

フォン・ウイゼ氏が本論文中に説述して居る事は、フォン・ベロー氏の批評に答へて、特殊學としての社會學の可能性及び必要性を論證すると云ふ點から見て興味あるばかりでなく、獨逸に於ける社會學の研究及び教授の現状を知る爲めに、余輩に有益なる資料を與へるものとして、又

大に興味あるものである。それで余は此處に本論文の主旨を稍々詳しく述べて置きたいと思ふ。

夫れフォン・ベーローは、一般的或は普遍的學問としての社會學は不可能にして、分析を越へて總合に達することは、社會學に於て殊に困難であり、又今日必要なる大學教育の改良を、百科全書の教授職を設置することによりて成就することは出来ないと論じて居るが、其の所見は正當である。併し特殊學としての社會學の建設をも排斥せんとするは正當でない。同氏は社會學的問題の存在を認めて居るが、しかも其等の問題は在來の諸學問の範域内に於て最もよく研究されて居るし、又研究し得られるので、特に社會學なる新學問を建設する必要はないと主張して居る。而して共同生活關係が歴史、法學、經濟學、民族學、神學、哲學、言語學其他に於て、既に研究されて居ることは事實である。しかも其等の諸學問の研究の外に、特に人間關係の諸形式を對象とする一の獨立なる特殊科學が必要であり、又有益であるのである。フォン・ベーロー氏が、特殊學としての社會學の建設を承認しまいとする理由として論述して居ることは、明白でなく、又充分でない。

夫れソフィステンの時代以來、人間を取扱ふ總ての學問が、個人と社會との關係を種々なる方面に於て常に論究して居ること、又其の場合に屢々、精神的集團勢力が指導的、能動的な要素として、又個人が依存的、受動的な要素として考察されて居ることは、何人も疑はないであらう。

實際に於て、社會は實在的現實的なものにして、個人は大なり小なり一の抽象であるを見ることは、決して近世社會學の發見ではない。個人主義を征服することが、社會學の本質及び主要任務であると解する人々は、社會學を誤解して居るのである。個人主義の征服と云ふ問題は、社會學によりて他の種々なる問題と共に、只呈出されて居るだけで、決して今日既に、普遍主義を確立する様に、終決的に解決されて居ると云ふのでない。而して余輩の社會學的研究によれば、人間と社會との關係の問題に於て、從來の問題呈出の仕方は正當でなく、隨ふて其の問題は全く解決され得なかつた。是れ一切の有機的實在物及び彼等の共同團體は同時に個體にして集團(*Zugleich Individuen und Kollektivitäten*)であるからである。「絶へず個人に對して鬭争的態度をとる」社會學は、學問的認識の前階段に停滯するもの、而して絶へず集團的勢力に對して鬭争的態度をとる社會學と同様に、排斥さる可きものである。

實證主義社會學は、今日獨逸に於ても尙ほ其の代表者(ミュラー・リアーの如き)を有する處の社會學の只一分枝に過ぎない。併し社會學の範域に於ける今日の多くの研究者は、例へばオートマー・シュパンの如き、社會學と實證主義とを同一視することに強く反對して居る。余輩の見處では、人々は歴史哲學と社會學とを、充分に鋭く區別して居ない様に思はれる。進化や階段構成の法則を確立せんとすることは、社會學の任務ではなく、夫れは歴史哲學の任務である可きであ

る。而してかゝる意味にて、余輩はコントを社會學者と認め難いので、コントは本來人類の進化や其の階段構成の法則を發見せんとしたのに過ぎないのである。此の所謂「社會學の發明者」の仕事は、今日の社會學と只僅かな關係を有するに過ぎない。又彼の靜學と動學との區別は最早古くなつて居る。殊に注意す可きは、力學其物は最早此の區別を保持して居ないことである。

併し學問としての社會學は、天才的佛蘭西實證主義者コントから始まつたと見るは便宜である。是れ實に彼は實質に名を附したと云ふだけでなく、更に彼からして、社會を組織的に研究され得る對象と見る傾向或は努力が始まつたからである。夫れまでの一切の社會哲學及び倫理哲學、國家に關する一切の思辨、人間共同生活關係論に關する無數の一切の貢獻、總て其等のものは他の目的に向けられたる一學問の全體に附屬し、夫れに利用される研究に外ならなかつた。而して先づ統一體としての社會を、夫れ自身に於て一の新しき學問的對象として獨立させることが肝要であつたが、之を始めて遂成したのはコントである。

他の學問にありても、其の歴史が始まると云はれる時點は、常に異論なしに決定されない。此の事は殊に經濟學に就て認められる。ケネーを經濟學の父と認む可きか、又はアダム・スミスを夫れと認む可きか。重商主義は經濟學前史に屬するか。確かに社會學の前史は長い。吾人は政治學及び文化史と結び附け、數世紀を通じて其の流を追はねばならないであらう。併しシュパンの

如く、カント及びフイテに於て社會學の創設者を認めんとするは穩當でない。獨逸理想主義哲學は確かに社會哲學の多量を含んで居る。併し社會化形式の組織的研究は、全く其の中に存在しない。更に今日の余輩はコントの跡を追へる百科全書的社會學者や、危險な非科學的な類比を重要視する生物學派の代表者も、何れも只徐々に生起する處の、明確に限定されたる一社會學の前行者としてののみ、見倣ねばならないであらう。世界及び人間を普遍的に把握せんとする彼等の努力は、大に吾人の注意を惹く、併し吾人の従ふ可き先例を與へるものでない。

歴史家と社會學者との間には、殆んど避け得られない深大なる反對が存立する様に見へる。六十年以前に人々が社會學ゲゼルシャフトウシセンシャフトと稱せしものに對して、總ての種々様々なる事物を包括する一の學問と云ふが如きものは、決して考へ得られないと言明せるトライチュケの著作に於て、歴史家が社會學者に下せる最とも深刻な批評が見出される。歴史家は自分は文化の普遍的解釋者であると信するが故に、社會學の出現に依て歴史家の特權が損傷される様に感じたのである。而して社會學が歴史哲學として考へられ、夫れが一切の歴史的事象を解明せんとする性質を有する以上、歴史家が之れに對して猜忌の念を抱けるは、敢て怪む可き事でない。然るに他方に於ては、スベンサーの日以來社會學者間に、歴史の與へる資料に對する不信任の念が、大に強まつて居る。而して歴史哲學と社會學との奇妙なる合體は、不自然にして又不幸であつた。是れ心理的分析及び動機探

究の特に社會學的なる方法は、歴史的事實の評價及び過去に關する報告の利用に於て、吾人が最大の注意を拂ふことを要求するものであるからである。解釋慾及び思辨并に形而上學への傾向を有する實質的歴史哲學は、本來一切の經驗的及び精密的社會學の正反對である。かくて米國の社會學者や、歐洲にありてはワクスウエラーの如き人々が、歴史を補助學と見る見地を殆んど全く放棄し、其の探究を主として現在の社會的事實に限つて居るのは、注意す可きである。

然るに歴史哲學と社會學とを全然同一視せんとするバールトは、只歴史的に價值あるもののみが、社會學の對象であり得ると主張し、而してジムメルやワクスウエラーの如きは、歴史的資料の運用に於て、科學の對象となるだけ充分重要な其等の人間的關係を選択する標準を缺いて居ると非難して居る。バールトの考へによれば、人間的關係の總ての漣波も此の重要な度合を有するのでなく、只吾人が幾世紀を通じて追跡し得る持續的な意志及び精神の大潮流のみが、之を有するのである。而して其等の大潮流を敘述し、出來可くは又之を説明するのが、乃ち社會學の任務にして、かくて社會學は同時に歴史の理論となるのである。

此處にバールトの説を論評する暇はないで、只夫れに就て簡單に一言するだけに止めるが、夫れは全く承認され難きものにして、バールトの提出する標準よりは一層確實と思はれる他の諸標準がある。しかも歴史的資料を使用する必要、及び社會學の最も多くの章が其の歴史的部分并

に歴史的成分を有すると云ふ事實は、疑ふ可からざるものである。只此際に方法的疑問が重要であるだけである。又現在からの出来るだけ直接的な觀察材料は、あまりに主觀的に取捨されて居ると思はれる過去の資料よりも、一層歡迎さる可きである。此處には只ベーローが、社會學者の企だてたる歴史哲學に對して加へたる非難は、全く正當であると云へば、夫れで充分であると思ふ。

されど社會學外に於て、共同生活關係が舊専門學科に於て叙述され、取扱はれた仕方は又補充を要すると思ふ。ベーローが第十九世紀間に於て、社會學的問題を深く探究せんとする衝迫の強まれることを示す爲めに擧げたる多くの實例は、實に有益なるものである。從來不充分なる見地の下で考察された一の結合の認識に對する憧憬は、益々高まつて居たのである。

今や吾人は、舊社會學者殊にシェフレの如き社會學者も亦)の目標及び途は、遵奉する値なきものにして、よろしく放棄されねばならぬものなるを、喜んで承認せねばならぬが、併し吾人は又彼等があまりに多くを望んだことから生起せる、彼等の誤謬の歴史的必然性及び其の有益なることを、よく理解するのである。一科學が其の幼稚な時代に於て、其の目標をあまりに廣大に、又あまりに普遍的に見定めたとするも、それは其の科學にとりて決して有害であるとは云はれない。社會學の發達の始めに當て、學者の心を捕へて居たのは、總合を求める念、即ち社會化せる

文化人を正當に宇宙の秩序中にはめ込み、其の社會的諸勢力を自然科學的に決定せんとする企ては、現實に成就し得られるものであると云ふ希望であつた。而して夫れより生まれた偏局な思想的建築は、實に壯大な、吾人に教ゆる處多大なるものである。夫れはまさしく其の缺陷や偏見によりて壯大で、教ゆる處多大であると云ひ得られる。其等の人々は彼等の自から定めた任務の遂行可能性や困難を誤解して居たと思はれるので、丁度ベローが社會學的要求は人間に對する在來の學問によりてよく充たされ、其等の學問の成果は社會學的認識に對する吾人の欲求を充分に満足させると考へる時に、問題を誤解して居るが如くである。決定的なるものは、吾人が一の科學に於て到達せんと努力する最後の又最深の目標である。社會化の形式の分析は、只間接的に歴史家、法學者、言語學者等によりて行なはれるだけで決して完成され得ない。余輩の見る處によれば、社會學的認識を求めつゝ、しかもよく之を獲得して居ない第十九世紀の諸研究が、内容的なるものとの混合から形式問題を切り離す必要を、強く指示して居るのである。夫れは如何にしてなさる可きか、又夫れには如何なる困難が伴ふかは、後に論ずる。此處では獨逸に於ても亦益々、社會性の問題への新しき、より自由な、又より獨立な通路に對する願望が、強まりつつあることを指摘すればよいと思ふ。是れは決して單に一時的な流行でなく、寧ろ永續的に感ぜられたる精神的一欲求である。思惟する人は、如何なる法則に従ふて彼の自我が他の人々、團體

及び抽象的集團力に結び付けられて居るかを、理解せんと欲するのである。彼は夫れに就て舊學問から大に學び得る。併し彼は人稱代名詞の秘密の裏に達する爲めの、より直接的、より眞直な一路があらねばならぬと感ずる。ベーローの云ふ如く、ジムメルは彼の社會學に於て、「宛かも社會學的考察、個人の相互作用及び協働から歴史的現象を説明することが、比較的に新しき或物であるが如くに裝ふ」とすれば、是れ其の装ひの裏に、全く正當なる一思想、即ち此等の人間の相互關係を、社會學的に缺く可からざる補助學科がなし得るよりは遙に多く、特殊的諸目的及び事實的諸結合の交錯から究明せんとする思想が、潜在するのである。

尙ほ再びベーローの提出せる二つの中心問題に立ち歸つて考へて見よう。是れまでは、若しベーローが既に之れに解答を與へたと考へるならば、彼は誤つて居ることを確かめただけである。併し尙ほ彼の「實際的教授法に對する推論」を考へる時は、彼が與へ得たりし解答、(詳しく云へば彼の否定的答解の基礎附け)は一層明かになるであらう。

ベーローは社會學の教授に任命された學者が、或特殊な學科の専門家である場合に就て論じて居る(前章ベーローの論文參考)。

此處にベーローは、社會學の教科を設けるに就て起る處の眞實な困難を適切に指摘して居る。又社會學の教授が同時に之れに接近する或學科に於ける専門家であると云ふことも必要であると

思ふ。(但し此の場合に、何れの學科に優位が認めらる可きかを論争するは無益である。確かに哲學は先づ第一に擧げられるであらう。併し吾人は同時に社會學を論ずる哲學者は、公的生活の生きた觀想を有すること、彼は其の心眼が市場を眺め、又人間の雜間に向けられる哲學者であらねばならぬことを、要求せねばならないであらう。若し社會學者が同時に經濟學者であるならば、彼は經濟の技術よりはより多く、經濟の哲學に注意せねばならぬであらう。社會學者が民族學者或は土俗學者である場合に就ても、同じ事が云ひ得られる。)殊に「社會學的認識は精神科學或は文化科學の一切の學科の共同的研究を希願する」と云ふペーローの見解は、正當である。(自然科學に就ても亦、或學科殊に生物學及び人類學の共同的研究が望ましい。)多數の諸學科の専門家の協働は、一般に最も満足な、最も異論のない結果を産出するであらう。吾人若し内容から形式を抽出せんとするならば、先づ内容を知らねばならぬ。而して其の内容の知識は、接近せる専門學科が社會學者に與へるのである。併し特に社會的な抽象の仕方に対する社會學者の感覺は、具體的事實結合を知らんとする念よりも、更に強くなければならぬ。社會學者に對しては、總ての資料は、彼が人間と人間との相互作用に關して、夫れから引き出さる可きものを何よりもさきに、又出来るだけ充分に引き出すと云ふことによりて、先づ重要視さる可きである。

今社會學者が、一の専門學科に深い根柢を置くと云ふことは、確かにペーローの指摘せる弊害

を伴ふものである。かゝる社會學者は二君に仕へなければならぬ。例へば經濟學の専門家にして社會學を研究する人々は、經濟學の範域に於ける研究や理論の呈出する要求の多大なるをよく知つて居る。而して經濟學の専門家としては、其等の諸要求に應ずる様に、自分の研究を進めなければならぬと信するが、しかもそうする時には、社會學者としての任務を盡くすことが出来なくなる。此の際かゝる人々は、只經濟學の特殊的諸範域、例へば財政學や信用論の如きものに於ける獨立なる研究を段々に放棄し、而して特に社會學上收獲の多い經濟學の部分に、より多く力を注ぐことによりてのみ、二重の要求を充たし得るのである。併し此の如くに經濟學の要求にも應じつゝ、社會學の研究に従ふて行く時は、其等の人々は經濟學の要求にも應ずる爲めに、既に樹立した社會學案、其の遂成によりて特に社會學的研究の進歩が世人に切望される社會學案を、屢々幾十年間も遂成し得ないことになる。もつとも夫れが爲めに其等の人々の社會學的思想が、益々大に圓熟す可きことは確實である。しかも切迫せる社會學上の問題が呈出され、而して其の答解に力を盡くすのが、自分の任務と信する人々にありては、常に其の答解の爲めに力を注ぐことが出来ないで、屢々只之を眺めて居るだけに止まらねばならないのは、苦痛であるであらう。而してかゝる状態の下に於ては、社會學は到底充分に發達することが、出来ないであらう。獨逸に於ける社會學の歴史を批判する人々は、右の事情を觀過してはならない。獨逸に於ては

社會學の研究は、他國に比して後れて居ると云ふベツケルの意見は正當である。而して其理由は、つまり獨逸の學者は、大抵は只「副業」として社會學を研究し得るに止まると云ふことである。獨逸に於ては吾人は常に左の如き事實を目撃する。即ち學生時代には多くの人は特別な熱心を以て社會學の研究に這入り、又斯學に對する愛を失はないが、併し段々第二の専門學科（夫れは在來の何れかの學科にして、學者的聲望或は尊敬を一層よく保證するもの）の研究に、専ら力を注ぐ可く餘儀なくされてくる。かくて多くの社會學の着手や考案が、全く完成されずに終はる。更に他の學科の専門家の皮肉な、又惡意ある批評や、社會學の專攻者と云へばデイレタントと評されるかも知れぬと云ふ恐れが、始め社會學に興味を有せる人々をして、遂には全く之を放棄するに至らしめるのである。

ペーローのあまり重要でない意見の批評は、是れぐらひで止め、是れより社會化の形式の特殊なる一學問領域の生存能力に關する、彼の質問に答へることとする。

先づ方法問題に就て少しく述べて置きたい。若い科學に對して方法問題の根本的に重要なことは、何人も否認しないであらう。嘗てジムメルは、總て承認されて居る學問にありては、方法問題の議論は直ちに後退するが、併し新しき學問にありては、學問の體系に於ける其の地位を決定することの困難は甚大にして、其の方法の效果に關する論究は、一の新しき又獨立なる課題を

成すものなるを、適切に論述した。而して社會學に關しては、獨逸に於ては、方法の議論は一の廣大なる、恐らくはあまりに廣大すぎる範圍を占めて居る。元來此の議論の目標は、社會學の概念に於ける動搖の弊を除いて、之を確立することにあるが、併し終りなき議論によりて其の弊が寧ろ益々増大して居ると思はれる。此處にも亦迷はされない創造的精神の作業が、批評家の巧妙なる論議よりも肝要であるのである。デイルタイが嘗て述べたる左の語は、大に玩味す可きものと思ふ。「全體から考へると、實在の何れかの部分内容が、夫れから證明される又有効なる命題を、發展させるに適するや否やと云ふ問題は、余の眼前に置かれて居る小刀がよく切れるや否やと云ふ問題に似て居る。其の小刀がよく切れるや否やを決定するには、吾人は夫れで切つて見ねばならないのである。一の新しき學問は重大なる真理の發見によりて構成されるので、事實の廣大なる世界に於てまだ占領されて居ない一地域を區劃する事に依つてゐない。」獨逸に於て最近二十五年間に現はれたる、學問的に重要な社會學的文献の殆んど五分の四ほどは、方法問題に献げられたるものである。先覺者が此の問題に停滯して居れば居るほど、新著の著者は益々、「如何にして社會學的學問は可能であるや」と云ふ問題を、常に新たに呈出す可く餘儀なくされて居る。此のかなり無効無力なる論争は、吾人の時代のアレキサンドリア風潮への、一の喜ばしからぬ貢獻をなして居る。此際斷乎として實質を掴むことは、一の救濟法であるであらう。自然科學的社

會學に於ては、事情は文化科學的社會學に於けるほど悪くはない。余輩は何れの科學も、其の限界や可能性に關して、此の如き不安心な臆病な考慮の前階段を通過せねばならぬ必要は、決してないと信じたい。

一の科學の目標確定に於て、吾人は之れに方針を與へる最後の理想的目標と、直接の仕事に對する特殊的課題とを區別せねばならぬ。而して余輩は社會學の理想的目標を、最後の大生命問題、即ち個人の運命と集團の運命とは如何に結合されるや、個人は如何程夫れ自身に屬し、如何程他人に、又如何程集團的勢力に屬するやと云ふ問題の答解に於て認める。又之れに達する途を社會化の諸形式の研究に求める。フィアカントは關係の範疇 (die Kategorie der Beziehung) を、特に社會學的な範疇と稱して居るが、夫れは實に名言であると思ふ。

今社會化の形式を内容から分離する可能性に就ては、啻に社會學の反對者によりて疑はれたばかりでなく、社會學者自身によりても疑はれた。シュバンは最ども烈しくジムメルの社會學の概念に反對して居る。彼は色々論ずる中に、左の如くにも述べて居る。「されば對象の形式的性質は、只ジムメルの社會學にのみ特有のものであると云ふ見解は、排斥されねばならぬ。對象の形式的性質は何處に於ても缺けて居ない。さればジムメルの見地は不正當であることが明らかである。見掛上の内容、即ち經濟、國家、法律、政治、言語等は明らかに特殊的諸形式にして、總て

の人々によりて使用され得るもの、決して内容ではないのである。ジムメルの形式概念は混亂して居る。夫れは雜草と蕪菁とをゴツチャにして居る。かくて、他の方面から見れば甚だ有益な、怜悯なるジムメルの個別的諸研究は、大部分心理學的にして、只一部分社會學であるに過ぎないことになつて居る。尙ほ其の社會學的な部分も直ちに統一的、「形式的」でない。其の多くを、例へばシェフレーは彼の比較體制論、發達論、集團結合論等に於て、又彼の社會的空間時間論に於て取扱ふて居た。「トレルチも矢張り社會的形式の分離可能性に就て、疑を挿んで居ると思はれる。彼は社會學と社會經濟學との關係を取扱ふに當て、左の如く述べて居る。「其の時其の時の社會學的全構造其物は、常に經濟的技術的諸原因によりて甚だ強く制約せられ、其の持續性及び統一性の多くを、まさしく其等の諸原因に負ふのである。」

社會學に於ける形式の抽出は、其の他の社會諸科學に於て必要なる形式の抽出から、只度合に於て差異するだけであると云ふシュバンの見解は、承認さる可きものである。併し此の場合に於ける度合の差異は、甚だ重要なものである。科學的研究の對象たる一切の人間的事象から、只あるがまゝの人格者及び團體の相互關係に就て、吾人に説明を與へ得るものゝみを引き出さんとするならば、又人格者及び團體の協力作用及び反對作用の目的、分析并に動機を、只吾人が人間的關係をあるがまゝに分析する材料としてのみ取扱ふならば、此處に社會學と他の社會的諸科學

との間の一の差別が明らかに認められ、而して其の差別は實際に於て形式の範疇と内容の範疇との對立によりて、最も明亮に指示されるのである。

此處に特有の問題となるは、確かに人間的關係の形式を人間的關係の實質的內容から抽出することが、果して可能であるか、又如何程可能であるかと云ふこと、まさしく此の關係は具體的な關係目的と甚だ密接に結合されて居るのでないかと云ふことである。人々は又其等の最後の法的及び規律的關係を知得すると云ふことは、甚だ困難な分析を企だてる勞に酬ゆるには、あまりに小さき、あまりに一般的なものでないかと疑ひ得る。人々は各々の具體的な實質的事柄が、人と人との關係を常に變更し、而して、人々を結合す可く或は分離す可く強制する諸般の力は、實質的なものから生まれるのであると考へるであらう。

此の問題の困難なることは云ふまでもない。併し夫れは解決し得られないものでなければ、又解決しても効果のないものではない。人々は最初の化學者に對して、同様な反對を試みた。人々が若し、如何にして二人或は多數の人々の精神的或は實際的結合があるがまゝに作用し、如何に人間の中間範疇、「我」と「汝」との結合、「我等」の本質が作られて居るかを知る能力を、永久に人間の精神から奪ひ去るならば、是れ人間の精神を甚だ貧弱なものとならしめるのでないか。

恐らくは余輩は今日承認するよりは、一層廣大なる決疑論^{カレンスチク}に達するであらう。恐らくは多數な

る關係諸可能が、小數に單純化されるであらう。恐らくは余輩は余輩の形式に、一層多くの「實質」を取り入れ、一の獨立なる學としての社會學の特質に、直ちに相應すると見へるよりも以上に、經濟的、言語的、個人心理學的、生物學的事實等を考へに入れねばならないであらう。總て此等のことを、余輩は先づ根本的に研究せんとするのである。特に注意すべきは、形式的原理はまさしく一の發則誘導的原理であることである。余輩は「形式は内容から離される」と云ふ假説を設定する。而して此の出發點から進まんとするのである。

此處に今日自分(フォン・ウイゼ)が、一般的社會學 (Allgemeine Gesellschaftslehre) の範域を如何に整理し、又自分の研究する綱目を如何に別つて居るかを簡單に表示することは、自分の主張を明らかにする爲めに有益にして、且つ讀者の理解を助けると思ふ。

第一部

1、學としての社會學の任務。社會學と他の個別學の社會學的方法の關係。社會學的認識の困難。社會學的洞見の障害としての先入意見。

2、社會學の歴史。(百科全書的思想より社會化形式論への發達。)

3、組織されたる智識の枠内に於ける社會學の地位。

第二部

4、社會化の本質。關係の範疇。(絶對的及び相對的社會概念。過程として社會化。分化と集結。勞働分別(分業)と勞働結合。

固持と變化。舊と新。世代連續。

5、社會化の心理的及び身體的前定と手段。(習慣。親和力。模倣——同情と反感——上位と下位或は支配と服從——相互並存。相互共存。相互合致及び相互分離。)

6、社會化の諸形式 = Gemeinschaft und „Gesellschaft“ —— 群族。種族。國家。民族。人種——職業。身分。カステ。階級——孤獨性と社交性——^{ヂヤンセ}大眾。多數者。指導者と隨從者——相互扶助と相互障礙——選擇と同等化。

7、社會化の要素。個人の問題。

8、社會化の主要原理及び目的設定——個人主義。普遍主義及び神秘主義——自由。平等。同胞。

9、社會的現象としての組織されたる精神生活。(學問、藝術、宗教、哲學、道德——教化の本質。)

10、組織されたる社會的行動。體制論。(經濟、政治、戰爭。)

11、社會的行動及び組織されたる精神生活の形式構造物。(國家——結婚及び家族——教會——企業——組合。)

12、結論。社會學と倫理學。

右の一般的社會學の概觀に就て、尙ほ少しく述べて置くが、右の概觀によりて吾人は先づ關係の本質から出發して行くと、今日の狹義に於て社會學的と稱せねばならぬ内容豊富なる多數の問題が存在して、吾人の研究を要求することが、明らかに示されると思ふ。併し此等の諸問題を組織的結合に於て、社會學の如く深く研究する學科は全く存在しない。人若し此等の問題の組織的包括的研究を、哲學の任務と認めんとするならば、夫れは哲學の範圍を非常に擴大せねばならぬであらう。併し若しそう云ふ様にして此等の問題を哲學に於て研究せんとする場合には、此處

に形而上學及び倫理學と密接に接近して取扱はれることは、經驗的分析的なる社會學 (die empirisch verfahrenende, analysierende Gesellschaftslehre) に對して危險を生じ易い。

フォン、ベローは、社會學に於ては特殊の諸問題に分割して研究する必要、何れの他の學科に於てよりも一層大なるであらうと云ふて居るが、夫れは間違つて居ないと思ふ。併し此等の特殊の分析は、内部的協力を分散する弊を有しない。其の内部的協力は弱められずに存續する。社會學の行なふ分析は、人間から出發する處の、周邊的、遠心的でなくして、著しく求心的なる分析の一種である。嚴密なる總合は、吾人の研究が進めば進む程、ますますあなたへ後退する。かゝる總合は人間的諸關係の一の完全なる織物が、統一的に織り上げられることを意味するであらう。併し各分析は時には此の點、時にはかの點に於て、あるがまゝの人間に吾人を接近させ、而して夫れに依て常に吾人を、一切の文化總合も亦包含される處へ導くのである。尙ほ分析は大なる長所を有つて居る。夫れは多くの歴史哲學者の、堪へ得られない、早まり過ぎた、狂氣じみた思辨から、或は精々詩作に過ぎない荒唐な構想から、吾人を解放するのである。

併し社會學的形式分析 (die soziologische Formanalyse) に於て、吾人は如何なる方法を用ゆ可きか。此處に比較は主要手段である。先づ第一に、同様な共同生活目的が、種々なる體制オルガニザチオン或は組織によりて追求される場合が蒐集される。次に第二に種々なる目的が、人間の外部的編制の同様な道によりて追求される場合が蒐集される。而して第三に、其等の場合に於て人間が如何に相互に

反動するかい、研究さる可きである。かくて任意に二三の例を挙げれば、模倣、仲間團結、友人團結其他の諸現象が、歸納的に研究されるのである。又其等の歸納的研究に、公理からの演繹が相並んで行なはれる。而して一の道によりて得られたる結果は、他の道によりて得られたる結果を參照して、制御されるのである。

尙ほ、取扱はる可き人間的關係の選擇の標準に關する、さきに少しく述べた問題が残つて居るが、バールトはさきに述べし如く、歴史的重要を以て其の選擇の標準としようとする。併し余（フォン・ウイゼ）は歴史哲學者が、何が歴史的に重要にして、單に「漣波」に過ぎないものでないかを、異論を起させずに、又偏見なしに、吾人に言明し得ると云ふ信仰を、受け入れることは出來ない。余は此のあまりに動搖し、又屢々濫用されて居る基礎に於て、標準を求めようとはしない。只哲學或は一の一般的な、單に自然科學的でない人間學アンтрополоギのみが、標準を與へ得るのである。即ちあるがままの人間に關して、光を或は説明を與へる總てのものは重要である。此處では、此の一般的な（更に詳しき解釋を要する）命題を述べるだけで足りると思ふ。

却說特殊學としての社會學に就て、以上述べし事の多くは、尙ほ明瞭を缺いて居ると考へる人々は、吾人は今日漸く一新學科の建設に着手し始めたのであることを記憶されたい。吾人若し社會學に就て、今日既に全く疑を許さぬ諸命題に於て、一切の學的結果を簡單明瞭に約述することが出來るとするならば、夫れは既に社會學が完成し、吾人の任務が完全に遂成されたことを意味するであらう。今尙ほ社會の概念は茫漠として居ると嘲弄する人々は、經濟或は國民經濟と云

ふ語の意味に就て、今日尙ほ盛んに論議されて居ることに注意されたい。リーフマン(Liefmann)は「第十九世紀の中頃には、人々は經濟理論は完結し完成して居ると考へたが、其の後總てが再び動搖して來た」と云ふて居る程である。又法學者は彼等の基本概念たる「法」の外見上の確實を、只彼等が總て不確實なるものを、國家の概念か又は(自然法說的に)正義と稱せられるものに押し込むことによりてのみ、誇り得るのである。

フォン・ウイゼ氏がフォン・ベーロー氏の意見を批評し、又之れに答へて、特殊學としての社會學の可能性及び必要性を論證せんとする論文「特殊學としての社會學」の中に述べて居ることは、以上述べ來りしが如きものであるが、余輩は先づ此の論文をフォン・ベーロー氏の論文と比較することによりて、今日獨逸に於ける社會學の研究及び教授の一般的狀態を、大體上學ぶことが出来るのである。次に又専ら社會形式を對象とする特殊學としての社會學の概念が、さきにジムメルによりて唱へ出されたる後、今日如何に展開されて居るかを、大體上學ぶことが出来るのである。併し余は是れより更に、フォン・ウイゼ氏は如何にして右の如き特殊學としてのジムメル社會學概念を遵奉するに至れるか、又右の論文後同氏は之を更に如何に展開して來たかを、稍々詳しく研究して見たいと思ふ。而して余の知る處では、同氏の最初の社會學上の著作は、千九百六年に出版された「社會學の基礎確立に就て」(Zur Grundlegung der Gesellschaftslehre. Eine kritische Untersuchung von Herbert Spencers System der synthetischen Philosophie. 1906)であるが、余は先づ此の著作に於ける同氏の社會學論を研究することとする。